特集

Let’s start with Well-being

Let's start with Well-being

特集担当主査：岩井綾
特集担当副査：中村智昭
特集企画担当：青木崇光、青柳広樹、大道健矢、川崎裕太郎、瀬尾弘美、中野太雄、藤田クラウディア、森章太郎

ABSTRACT

In recent years, discussions in the Journal of JSCE have sought to make visible those who have not been adequately included in society and to reconsider the nature of infrastructure from that perspective. What has emerged is the realization that those engaged in civil engineering are not exempt from these issues themselves. The well-being of practitioners, including their working styles, relationships, and physical and mental health, is deeply connected to the sustainability of the profession and society at large. This special issue turns the focus inward, emphasizing that maintaining one’s own well-being is not a self-centered act but a foundation for broader social contribution. By exploring the interplay between “self-interest” and “altruism,” the issue highlights how individual awareness and small daily actions can expand to influence organizations, communities, and society. A conceptual model illustrates this cycle, showing how well-being circulates between individuals and the wider social context. The issue is structured in four parts: an introductory discussion on the concept of well-being and survey of current industry practices; nine case studies showcasing initiatives by governments, companies, and individuals; and a roundtable dialogue among children, professionals, and practitioners. Together, these contributions encourage readers to reflect on their own relationship with happiness and consider how new forms of civil engineering might emerge from everyday life and practice.

特集の背景と狙い

これまでの土木学会誌特集（2022年4月号『Allyへ繋がる途（みち）』2024年7月号『Allyがつくるインクルーシブインフラ』）では、土木業界の多様性や社会に十分に包摂されてこなかった人々の可視化を通して、インフラの在り方を問い直してきた。

こうした議論を通じて浮かび上がったのは、「インフラを担うわれわれ自身もまた、例外ではない」という事実である。土木に携わる人々が日々直面する働き方や人間関係、心身の負担もまた、個人の幸福や働きがいを左右する重要な要素である。

今回の特集では、その視点をさらに自らの内側に向け、われわれが思考停止せず、まずは心身を健やかに保つことの重要性を考え、「Well-being（以下、ウェルビーイング）の考え方」を取り入れることで、より広く人を包み込み、社会全体の幸せを形づくることへとつなげたい。

そのために、「利己」と「利他」の関係を起点に、日常や現場で実践可能な行動や気付きを収集し、ウェルビーイングを〝自分ごと〟として捉え直す場の提供を目指す。

「ウェルビーイングって何？」―概念整理

「ウェルビーイング」という言葉は、新しい概念ではない。もともとは、心身ともに健やかで、社会の中でいきいきと暮らしている状態を指す。つまり、単に病気がないとか、不便がないといった消極的な意味ではなく、〝自分らしく安心して生きられる〟、〝満たされた状態〟を表す。土木の視点から見れば、ウェルビーイングとは「暮らしやすさ」や「安心感」と密接に結びつく。安全な堤防や便利な道路を整備することは、基盤を築く営みであり、社会の幸福を支える。しかし、われわれも、この言葉を真剣に語り合い、言語化してきた経験は案外少ない。だからこそ、この機会に「ウェルビーイング」を自分ごととして捉え直してみてはどうだろうか。

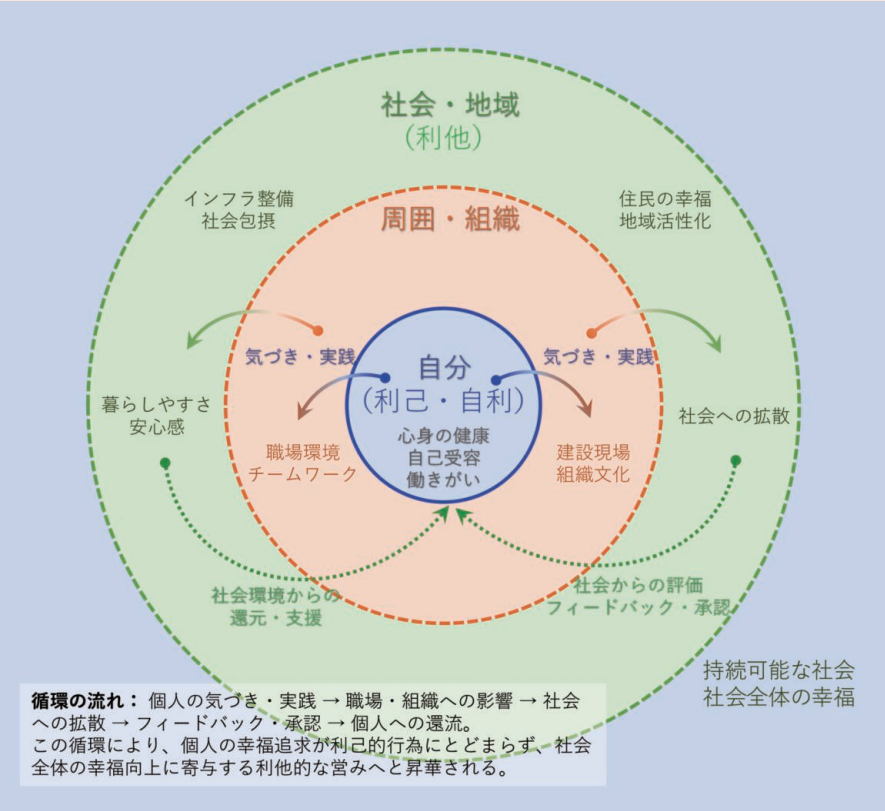

図1　ウェルビーイングの循環拡散プロセス

『利己の在る処』―自分から始まる、みんなへ続く道

ここで、ウェルビーイングを「自分から始める」ことの意味を整理する。個人が自らのウェルビーイングに気付き、日常や働き方に取り入れることが起点となり、その積み重ねが職場や組織の関係性を変え、やがて地域や社会へと広がっていく。

この過程においては、「利己（または自利）」と「利他」の関係性が重要である。自分を大切にする行為は、他者への配慮や社会への還元を生む基盤となる。さらに他者からの承認や反応は利己の充足に寄与し、利己と利他の好循環を生む。こうした循環は、建設現場や生活空間の在り方にも反映される。現場が単なる「働く場所」から、住民や働く人の「幸せに寄り添う空間」へと変わる座談会で示す事例は、その象徴といえるだろう。

図は、個人の気付きから組織・社会への広がりまでのプロセスを可視化するものである。中心に位置する「自分（利己・自利）」が中間の「周囲・組織」を介して外側の「社会・地域（利他）」へと影響を及ぼし、同時に社会からのフィードバックが再び個人へ戻る循環を示している。すなわち、ウェルビーイングは一人の内面にとどまらず、利己と利他の循環を通じて社会全体の幸福を育む。

特集の構成

本特集はウェルビーングの「入門編」として、まず、学術的視点と業界実態調査を通じて『利己から利他へ』の基盤を整理し、土木特有のウェルビーイングへの視座を提示する。続いて、行政・企業・個人による九つの実践事例を取り上げる。最後に、子ども・専門家・実践者による座談会を通じて、世代や立場を超えた対話から、幸福と社会貢献のつながりを深く掘り下げる。

本特集では、多様な事例や座談会を通じて、現場や暮らしから立ち上がる新しい土木の姿を描く。読者が自らの幸せを考える機会となれば幸いである。